

パレスチナ教育支援事業 体験型報告会

～補助資料～



2014年1月25日（土）14:30～16:30

於：フェニックスラウンジ

（新宿区馬場下町 18 フェニックスビル3F）

講師：イハップ・ザハダア氏

（パレスチナ NGO 「イエス・シアター」 俳優／ドラマ・ティーチャー）

〈補助資料内訳〉

- ① パレスチナ地図集
- ② パレスチナ、ヘブロン予備知識
- ③ 現地メディアで読むパレスチナ
 - ・ ガザ攻撃：アル＝ダロウ一家の大厄災
 - ・ 国連、「パレスチナ国家」承認
 - ・ 弁護士が語った「イスラエル当局の拷問によるジャラダットの死」
 - ・ 2013 年を振り返って
- ④ Yes4Future 参加者より
- ⑤ 生活の場からパレスチナにつながる
～パレスチナ製フェアトレード商品の紹介～

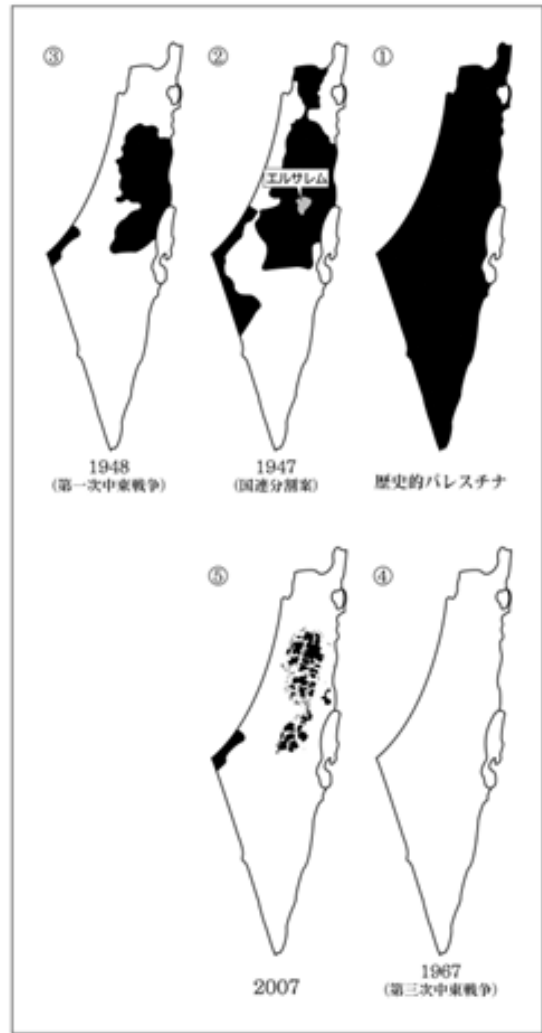
● パレスチナ地図集

◆パレスチナ周辺図

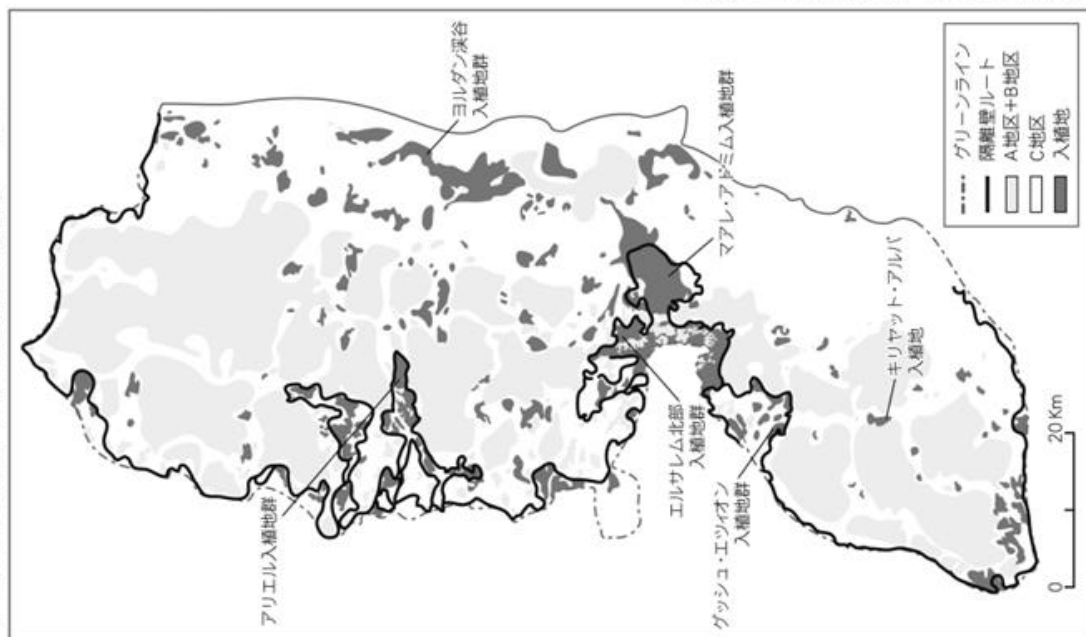


(著作者：現代企画室『占領ノート』編集班／
遠山なぎ／パレスチナ情報センター
<http://palestine-heiwa.org/map/s-note/>)

◆パレスチナの歴史的変遷図



◆ヨルダン川西岸入植地分布と隔離壁ルート図



* 入植地にイスラエル軍基地・入植者耕作地を含む

A地区：行政権、警察権ともにパレスチナ（ヨルダン川西岸の17.2%）
B地区：行政権がパレスチナ、警察権がイスラエル（同23.8%）
C地区：行政権、警察権ともにイスラエル（同59%）
（オスロ合意に基づく区分け。割合は2000年のデータによる）

● パレスチナ、ヘブロン予備知識

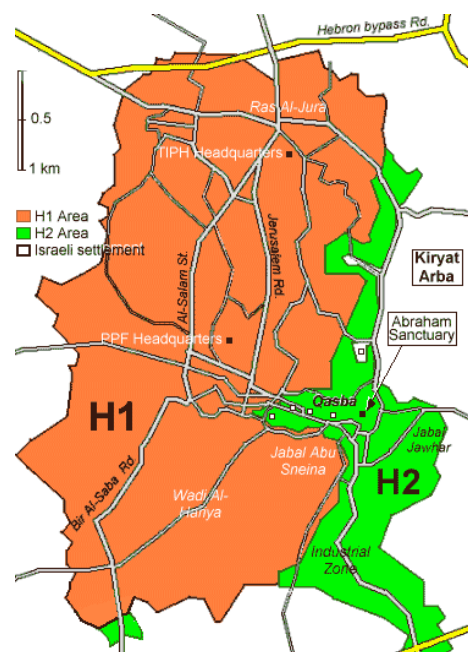
パレスチナ基本情報

- ・ 国家元首：大統領マフムード・アッバス
- ・ 政府首班：サラーム・ファイヤード
- ・ 人口：420 万人
- ・ 平均寿命：72.8 歳
- ・ 5 歳未満の死亡率：29.5 人（1000 人中）
- ・ 成人の識字率：94.6%



事業地ヘブロン

- ・ 人口 850,000 人（ヘブロン県）
 - ・ 西岸地区最大の都市
 - ・ 旧市街の中心には、イスラム教・ユダヤ教双方にとっての聖地が存在。
 - ・ 1997 年の「ヘブロン合意」により、パレスチナが管理する H1 エリアと、イスラエルが実行管理する H2 エリアに分離。H2 エリアの閉鎖による住民の締め出しや商店街の疲弊は深刻な状況。
 - ・ 市内中心地に 4 つのユダヤ人入植地が存在。入植者を「守る」という名目で数多くのイスラエル人兵士が常駐。
- * 事業地ヘブロンの詳細については、本事業小冊子 P.6 でも紹介しています。



(地図引用)

<http://www.jewishvirtuallibrary.org/jsourc/e/images/maps/h1h2map.gif>

(参考文献・参考 URL)

- ・ アムネスティ・インターナショナル日本『アムネスティレポート 世界の人権 2012』（現代人文社、2012 年）
- ・ JVC「ヘブロンの休日」<http://www.ngo-jvc.net/jp/projects/palestine-report/2009/09/000382.html>
- ・ 広河隆一『パレスチナ 新版』（岩波書店、2002 年）

● 現地メディアで読むパレスチナ

PB の教育支援事業がはじまった 2012 年には、パレスチナではガザ攻撃や国連のパレスチナ国家承認などの大きな出来事がありました。

イスラエル側メディアでは「ガザ戦争」として報じられた攻撃は、2012 年 11 月 14 日から 21 日までの 8 日間に渡り、イスラエル側は 6 人の死者、240 人の負傷者を数えました。一方パレスチナ側の死者は 165 人(内 61 人が 17 歳以下、18 人が 50 歳以上、11 人が成人女性)、負傷者は 1269 人(内 500 人が 17 歳以下、88 人が 50 歳以上、212 人が成人女性)に上り、多くの市民の住居や学校、病院などの公共施設、スポーツ施設、モスクや教会などの宗教施設が破壊されました。またこうした極めた深刻な被害状況により、子供たちをはじめとする市民は大きな心理的ストレスを受け、停戦後も様々な体調不良や異変を訴えています。¹

国連におけるパレスチナ国家承認は、2012 年 11 月 29 日、ニューヨークでの国連総会場で議決されました。これは、パレスチナの位置づけを「オブザーバー組織」から「オブザーバー国家」に格上げするもので、事実上、国際刑事裁判所への人権侵害訴追の公的権利獲得への道を開くものです²。また、世界的検索サイト Google がパレスチナの地名表記を「パレスチナ自治区」から「パレスチナ」に変更したことは、この決議を踏まえての決定であったとしています。一方イスラエルは、パレスチナ国家承認の決議に対し、パレスチナ人に対する「懲罰」として新たな入植地を建設すると発表しました。

事業 2 年目の 2013 年はといえば、2 月には 2 人のパレスチナ人拘留者がイスラエル当局の拷問により亡くなったことを受け、パレスチナ市民による大規模な抗議デモや拘留者のハンガーストライキが行われました。拷問はあらゆる国際条約で禁止されていますが、イスラエルは国連規約の拷問に関する項目の批准を保留するなど、「治安」の名のもと、拷問を許容しています。パレスチナ人拘留者へのイスラエル当局の拷問の問題は、西岸・ガザの占領以降、アムネスティ・インターナショナルなどの世界の人権団体や国際赤十字委員会などにより訴えられています。政治犯への拷問は日常的、組織的に行われているとされ、窒息、睡眠妨害、トイレの制限、殴打、電気ショックなど、肉体的・精神的侵害行為を用いた尋問の実態が報告されています。

2013 年は、アメリカのオバマ大統領による初のイスラエル／パレスチナ訪問やアメリカ政府仲介の下での 3 年ぶりの中東和平交渉再開など、外交上の目立った動きもありました。「和平交渉」と言えば、パレスチナを平和へと導くもののように聞こえますが、実は様々な問題を孕んでいます。パレスチナ難民の帰還権の問題やエルサレムの帰属問題等の重要案件は先送りにされ、また、イスラエルの入植地建設はむしろ拡大の方向にあります。93 年のオスロ合意から 20 年、一向に状況が改善されないどころか、パレスチナはより厳しい状況に追いやられているという現実がそこにはあるのです。

一方では、ガザ出身の歌手ムハンマド・アッセフがアラブ諸国で人気のオーディション番組「アラブ・アイドル(Arab Idol)」で優勝したというのも、2013 年のパレスチナをめぐる話題の一つでした。ハン・ユニス難民キャンプ出身の 23 歳は、パレスチナ人として初めての優勝者となり、世界からの

¹パレスチナ子どものキャンペーン「ガザの子供支援のお願い」

<http://ccp-ngo.jp/document/%E5%AD%90%E3%81%A9%E3%82%82%E6%94%AF%E6%8F%B4%E3%82%A2%E3%83%94%E3%83%BC%E3%83%AB2012.11.pdf#search=%E3%82%AC%E3%82%B6%E3%81%AE%E5%AD%90%E4%BE%9B%E6%94%AF%E6%8F%B4%E3%81%AE%E3%81%8A%E9%A1%98%E3%81%84>

² しかしながら、多くの欧米諸国は、国際刑事裁判所(ICC)で正義の実現を求めるパレスチナ人の闘いを「和平」の名のもとに阻もうとしており、日本政府も、「(和平)交渉再開に否定的な影響をもたらす可能性のある国際機関への新規加入等については慎重な対応が求められる」との見解を示している。

(<http://www.ngo-jvc.net/jp/projects/palestine-report/2012/12/20121205-palestine.html>)

注目も集めました。

これらの出来事について、パレスチナでは、どのようなことが、どのように報じられていたのでしょうか。日本の主要メディアでは報じられない「現地の人々の発信」に目を向けることは、パレスチナ問題に関して、普段触れているメディアの情報を客観的・批判的に捉えることに繋がります。

下記では、パレスチナの主要インディペンデントメディア「Ma'an News Agency」発の記事の日本語訳を掲載します(Ma'an News Agency に関しては、本資料の「書籍、ウェブページ紹介の項」を参照)。

ガザ攻撃：アル＝ダロウ一家の大厄災

(2012年12月1日付、アフマド・フェルワナ寄稿 出典：Ma'an News 原文下記参照)



これは、2012年11月のイスラエルによる攻撃下のガザでの生活について綴られた一連の投稿の5番目の記事である。

<11月18日>

疑念の鉤爪が、私が持っていたはずの心地よい気持ちをずたずたに引き裂いた。その不正義の丘では、無情な戦争の非人間性が揺るぎのない凶暴さとともに、何

も知らされないアル・ダロウ一家の幼子たちやお年寄りに襲いかかり、死の宣告を突きつけた。

その一家にとっては、11月18日は時の終わりを意味した。それは、アル・ダロウ家の大厄災(*1)だ。そして、私を含めた多くの者にとって、それは、亡くなった者の命の価値とは何だったのかなのかを考えさせられる時となった。

私のなかにある、抑圧された人道性へのわずかな信用を必死につかもうとしながら、私は気が遠くなり、無慈悲な死の矢が飛び交う悪魔のような空と、残虐性の羽で覆われて暗くなった太陽のなかを、呆然と漂っていた。

抑圧された自由、行くあての無い希望、満たされない願い、窒息させられた夢、達成されないゴール、聞かれることのない叫びや声、青ざめた笑顔、見えない道筋、そして何よりも、失われ、脅かされた魂。それらが、ガザの監獄のような雲空の中に、私が見たもののすべてであった。半世紀以上もの間、自由と正義の雲によって吹き飛ばされるのを待っているパレスチナの暗雲である。

誰があえてこんな生活を味わってみたいと思うだろうか。しかしこれこそがガザに住むガザ市民の生活だ。T. S. エリオットの『荒地』の現代版とでも言おうか。しかし、ここでは「4月が最も残酷な月」ではなかった。ガザでは、それは11月だ。そして、恐怖は、「一握の塵」のなかではなく、「一連の空爆」のなかで私たちに突きつけられた。

これが、命の価値の対極で破壊されたガザの『荒地』である。

<11月19日>

攻撃が6日目に突入した11月19日、私にできることは、昼夜が過ぎるのをただひたすら数えることだけだった。時間がゆっくりと経過していくに連れ、ガザの状況はどんどん悪化していった。攻撃が激化するなかで、自分自身や家族に信じ込ませてきた大丈夫だという気持ちはどんどん薄れていった。自宅から半マイルも離れていない、トンネルがある地域は、F-16戦闘機による激しい空爆を受けた。私の家のバルコニーの向こうには恐怖が映し出される窓となり、爆発があるたびに、家族とともに煙柱（*2）がいかにか近くまで迫っているかを確認するため、走り寄った。

そのとき、私はショックな知らせを受けた。私が教鞭を取っているアメリカンインターナショナルスクールが、近くにある警察署へのイスラエル軍の急襲の際に一部破壊されたとのことだった。2008年12月から2009年1月にかけての22日間に及ぶガザ攻撃の際、イスラエルは、その場所はロケットの発射場所として、軍事目的で使われていたと主張し、激しい爆撃により、学校は完全に破壊された。それ以来、学校は、教育の使命を必死に果たそうとしてきた。しかし、ガザへの経済封鎖とガザ回廊で建設資材を入手する困難さから、学校の建物は決して再建されなかった。その代わりに、この4年間、学校側は3つのビルを借り、ガザ市民への使命を果たしてきた。しかし今回の攻撃で、再び学校の使命は妨げられ、戦闘兵器の破壊力をその身に受けることになった。

アメリカンインターナショナルスクールの建物は、攻撃の標的にされ、破壊されたガザの多くの建物の一例に過ぎない。市民や子供たちの不用意な殺害とともに増加の一途をたどった犠牲者の数を忘れてはいけない。そのとき私にできたのは、すでに胸の中にある深い悲しみに、悲しみの注射を麻薬のように過剰に打ち込み、生徒たちがちょっとでも絶望感少なく感じられるように接することだけだった。

これこそが、世界中にある戦争という盲目な巨人の姿だ。そいつは、破壊と血に飢えている。その代償は無実の人々の苦しみである。

アフマド・フェルワナは、ガザのアメリカンインターナショナルスクールで言語と文学を教えている。

（*注1）11月18日、イスラエルの爆撃により、女性4人、子ども4人を含む、一家の10人が犠牲になった。

（*注2）原文の"Pillars of smoke"という表現はイスラエルのスリラードラマのタイトルにかけていると思われる。

国連、「パレスチナ国家」承認

(2012年11月30日付、ベツレヘム 出典：Ma'an News 原文下記参照)

国連総会は2012年11月29日木曜日、パレスチナの位置づけを「(非加盟) オブザーバー組織」から「(非加盟) オブザーバー国家」に格上げする決議を、賛成多数で可決した。それは、暗にパレスチナを「国家」として認めるものである。票の内訳は、賛成138カ国、反対9カ国、棄権41カ国であった。決議投票前に行われたニューヨークの総会での演説で、パレスチナ暫定自治政府のムハンマド・アッバス議長は、「国連投票は二国家解決案の望みをつなぐラストチャンスになる」と訴えた。



「65年前の今日、国連総会は国連決議181号を採択しました。それは歴史的パレスチナの土地を二つの国家に分割するもので、イスラエルの出生証明書になりました」。

スタンディングオーベーションで迎えられたアッバス議長は、193カ国が出席する総会の場で、このように話を始め、さらに次のように続けた。

た。

「そして総会は今日、パレスチナ国家という事実に対して、出生証明書を発行するために召集されたのです」。

その後、アッバス議長は国連に対して、2012年11月のイスラエルによるガザ攻撃は、イスラエルによる占領の終結が喫緊の課題であることを浮き彫りにしたと語った。そして、「それはまた、イスラエル政府の占領政策と、凶暴な力と戦争への固執を強調するものだった」とした。

「国際社会は、今まさに、二国家解決案の岐路に立っていると、私たちは信じています」。

<多くの圧力に抗して>

「私たちはここ数ヶ月、国連における私たちの平和的、政治的、外交的な要求への応答として、絶え間なく押し寄せる脅迫を耳にし、ガザにおけるイスラエルの攻撃を目にしました」とアッバス議長は語った。「私たちは、イスラエルの要人が和平プロセスに対して誠意ある憂慮を表明するのを、一言も聞いていません」。

オーストリア、フランス、イタリア、ノルウェー、スペインを含む、少なくとも17のヨーロッパ諸国がパレスチナのオブザーバー国家への格上げ決議に賛成票を投じた。アッバス議長は自身のロビー活動の焦点を、パレスチナ自治政府への支援金の大部分を供給しているヨーロッパに絞った。一方で、イギリスやドイツをはじめとするその他の国は、棄権に回った。チェコはヨーロッパ諸国のうち唯一、アメリカ、イスラエル、カナダ、パナマ、そしてパラウやミクロネシアといった南太平洋の小国と共に反対票を投じた。

イスラエル首相ベンヤミン・ネタニエフはすぐさま、アッバス議長の演説は「敵意に満ちた有害な」ものであり、「誤ったプロパガンダ」の塊であると非難した。彼はまたアッバス議長の演説の後、イスラエル政府が出した声明の中で、「アッバス議長の演説は、平和を囁望する者の言うことではない」とも述べた。

アメリカの国務長官ヒラリー・クリントンは議決について、「不運で逆効果なもの」と述べ、和平プロセスにおいて、より一層障碍をもたらすとした。

アメリカの国連大使スーザン・ライスは、即急に和平交渉を再開する必要があるし、以下

のように述べた。

「パレスチナの人々は明日の朝目覚めたとき、(決議は)自分たちの生活に何ら変化をもたらすものではなく、恒久的平和の可能性が後退してしまっただけだという思いを持ち続けるだろう」。「アメリカは両者に、対立しているすべての事案に関して、条件なしで直接対話を再開することを要求する。そして、アメリカ政府は両者のこれらの努力に対して、精力的にサポートすることを誓う」。

彼女はまた、両者は「現地でも、ニューヨークでも、どこにおいても、いかなる挑発行為も避け」なければならないと付け加えた。

今回のパレスチナのオブザーバー国家への格上げは、正式加盟とは異なる。正式加盟には安全保障理事会の承認が必要であるが、そこでは、アメリカの拒否権が壁となる。しかし、オブザーバー国家に格上げされたことで、パレスチナは今後、国際刑事裁判所やその他の国際機関へのアクセスが可能になる。

弁護士が語った「イスラエル当局の拷問によるジャラダットの死」

(2013年2月24日付、ヘブロン 出典: Ma'an News 原文下記参照)



2月23日(土曜日)、拘留中に亡くなったアラファト・ジャラダット(30歳)(*)がイスラエル当局の拷問を受けていたと、彼の弁護士と抑留者担当省が明らかにした。

省の弁護士であるカミール・サバークは、直前の木曜日にジャラダットの最後の聴取に同席したと述べた。イスラエルの判事は、聴取を本来の予定から12日間延期していた。

「私が法廷に入ったとき、ジャラダットは判事の真正面にある木の椅子に座っていました。彼は背を丸め、具合が悪そうな感じでした」

「私が彼の隣に座ると、彼は、背中や体のあちこちがひどく痛むと言いました。そしてそれは取り調べの際中、暴行を受けたり、何時間も吊るされていたためだと言いました」。

「判事の決定により彼の聴取が延期されることを聞いたとき、ジャラダットはひどく怯えた様子で、残された時間を監獄の中で過ごさないといけないのか、と私に聞いてきました。それに対し私は、まだ取り調べ中だから、その可能性はあると答えました。弁護士であるため、その時点で彼の居る場所については何もしてあげることができませんでした」。

サバークは声明のなかで、ジャラダットの精神状態がとて深刻であったことに言及するとともに、判事に対して、ジャラダットが拷問を受けていることを報告したと述べている。それに対し判事は、ジャラダットは刑務所の医師による診察を受けるべきだとしたが、サバークが言うには、この処置は行われなかった。

パレスチナ抑留者担当省によれば、ジャラダットがメギッド刑務所で亡くなる前日、イスラエルの取調官がアル・ジャラメ刑務所内でジャラダットに対し、吊し上げや睡眠はく奪

などの拷問を行ったという。

ジャラダットの家族は、ジャラダットの遺体と対面後、遺体には体中流血の跡があったと語り、「心臓発作」による死亡だとするイスラエル側の説明は受け入れられないとした。

遺族によれば、ジャラダットの遺体の司法解剖はすでに終わり、日曜の夕方に、タルクミヤ検問所を通して、ヘブロンに移送されるとのことだ。

司法解剖は、パレスチナ人医師と囚人省の法律チームが立ち会いのもと行われた。

(*)2月18日ヘブロン旧市街にあるイスラエル入植地キリヤット・アルバ周辺でイスラエル兵への投石をしたとして逮捕・拘留されていた

2013年を振り返って

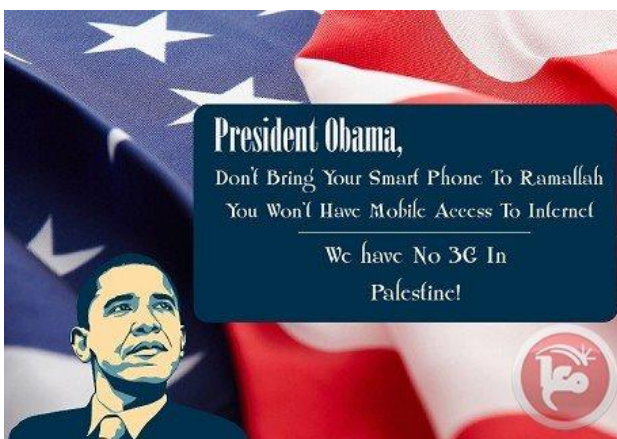
(2014年1月2日発行、1月6日更新、ベツレヘム 出典：Ma'an News 原文下記参照)



2013年、中東地域では引き続きアラブの春からの揺り戻しが見られる中、パレスチナは地域の力関係と内政分裂、イスラエルの継続的な占領とに相変わらず翻弄される一年となった。紛争下のシリアでは、四面楚歌の大統領バシール・アサドは依然として権力者としての地位を維持し続け、2013年は最も血に塗られた1年となった。エジ

プトでは、民主的選挙で選ばれたムハンマド・モルシ大統領が軍のクーデターにより失脚。その影響で、頻繁に（エジプト・パレスチナ間の）ラファ国境が封鎖されたり、密輸トンネル（注1）が破壊されたりするなど、封鎖状態にあるガザ地区に対する締め付けはより強くなった。パレスチナ国内はといえば、和平交渉への回帰は日常的な占領の苦しみを何ら終結するものではなく、西岸では、イスラエル軍により殺害された人の数は記録的多数となった（注2）。ガザでは、6年に及ぶイスラエルによる封鎖（注3）によりすでに逼迫した状態であった沿岸地域のインフラが、冬の大嵐により、更なる大打撃を受けた。

…(中略)…



3月

アメリカ合衆国大統領バラク・オバマが2009年の就任以来初となるイスラエル／パレスチナへの訪問のため、この地を訪れた。訪問は、概してイスラエル側の懸念事項に対処するためのものであり、その内容はイスラエル首相ベンヤミン・ネタニエフとのエルサレムでの会談に始まり、その後、ラーマッ

ラーにおいて（パレスチナ自治政府）アッバス議長との会談、ベツレヘムでの聖誕教会への短い訪問に終わった。その際、パレスチナの活動家たちはラーマッラーとベツレヘムにおいて、「イスラエル企業の競合になるからという理由で、パレスチナ人は 3G 通信回線技術を保有する権利を奪われている」という現状を訴えるプラカードを掲げた。エルサレムと西岸地区には何千もの警備隊が動員され、実質的な機能停止状態となるなか、パレスチナ警察とオバマ訪問に抗議する活動家との間ではもみ合いとなった。

（写真の中のメッセージ）「オバマ大統領へ ラーマッラーにはスマートフォンを持ってこないほうがいいですよ。だって、インターネットへのモバイルアクセスができないのですから。ここパレスチナには 3G 通信回線がないのです！」

…（中略）…



5月

西岸とガザ地区の人々は、ナクバ（注4）から65年目を迎えた。ナクバとは、何百何千ものパレスチナ人が、現在はイスラエルとされている地域にあった自分たちの故郷から追われる出来事であった。請願では65秒間のサイレンが鳴り響き、ラーマッラーやナブルス、カルキリヤなどの西岸の各都市では数

多くの人々が参加する追悼集会が開かれた。「歳月の経過により帰還権（注5）が無効になることは決してありません、なぜならこの権利はパレスチナ人の悲願の核心部分なのでから」と、パレスチナ解放機構（PLO）（注6）高官ワシル・アブ・ユーシフはヤーセル・アラファトの墓に集まった人々に語った。ガザ地区では、各党派のリーダーが通りに集まった聴衆に対して演説を行い、その中で、パレスチナの指導権の統一（注7）が最大の優先課題になることを訴えた。



6月

パレスチナ中の人々が、アラブ諸国で人気のオーディション番組「アラブ・アイドル」で優勝したガザ出身の23歳歌手、ムハンマド・アッセフに対し声援を送った。アッセフはパレスチナ人として初めてのオーディション優勝者となっただけでなく、その功績により、パレスチナ難民として初の国連親善大使としても名を刻むこととなった。彼は、

国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）（注8）より、初の地域青年大使に選ばれたのだ。彼の優勝を受けて、占領下パレスチナ西岸地区とガザ地区の多くの人々が街頭で歓喜の声を上げた。

… (中略) …



7月

何か月にも及ぶ働きかけの末、アメリカの国務長官ジョン・ケリーは、イスラエル・パレスチナ両政府間で、中東和平交渉の再開を基礎とする合意に至ったことを発表した。和平交渉は、パレスチナの土地に入植地が建設され続けることをめぐって、数年前に破綻していた。「合意に至ったことをこうして発表できる

のを、私は大変うれしく思う」とケリー国務長官は報道陣に語った。しかし、20年にもわたる和平プロセス(注9)に対して異議を唱える人々は、(今回の和平交渉再開への合意は)アメリカの圧力に屈するものだとPLOを非難。パレスチナの各地は、今回の和平交渉が始まってしまいう前にこの交渉を終結させるべきだと訴えるデモ参加者で沸いた。ハマース報道官ファウジ・バルハウムは、交渉の席に再び戻ることは「災厄」であり、入植地建設やパレスチナ人追放、そしてイスラエルの目指す「ユダヤ化」の動きを包み隠すものである、と述べた。彼は同時に、「パレスチナ政府とイスラエルとの交渉は(その引き換えに、ファタハとハマースとの)政治的和解を頓挫させる、非常に憂うべきことだ」とも述べた。民意を確かめるため、イスラエル・パレスチナ両国の指導者は、いかなる和平合意も国民投票に掛けることを約束した。



8月

同夏、和平交渉再開へパレスチナ自治政府を掻き立てる動きとして、イスラエル政府は、1994年のオスロ合意以前から拘束されていたパレスチナ人受刑者の一部を釈放した。今回釈放されたのは26人で、和平交渉の進捗次第で、全4回に渡って総勢104名の長期拘留者が釈放される予定とのことだ。この

中には、イスラエルの市民権を有する者も含まれる。今回恩赦を受けた受刑者の多くはイスラエル人に対する暴力行為で有罪判決を受けているため、受刑者解放の決定は、これらの受刑者による襲撃で殺害された人々の遺族の怒りを買ったが、イスラエル政府は遺族からの抗議を受け入れなかった。イスラエル政府は、今回の釈放という措置に反対する右翼の有権者や議員に配慮する形で、同時期、占領地における入植地の建設を推し進める計画を発表した。

… (中略) …



10月

10月は、イスラエル人入植者とパレスチナ人住民との間の暴力事件が目についた。入植者は定期的にオリーブ収穫時期に農家を襲撃し、数十人のパレスチナ人が負傷、そして、何百ものオリーブの木が根こそぎにされた。その他にも様々な事件が報告され、中には、入植者の投石により西岸地区のパレスチナ人の車が被害を受けるというものもあった。そ

の一方で、イスラエルメディアは、入植者専用バスにパレスチナ人が手製爆弾を投げつける事件を少なくとも2件報道した。うち一件はスクールバスに対するもので、バスの車体が破損したものの、負傷者は出なかった。それに加え、10月11日には、イスラエル軍の退役大佐が、西岸地区にある自宅において、パレスチナ人容疑者の襲撃により暴行を受け死亡、その妻も負傷した。こうした暴力事件が起こる中、パレスチナ・イスラエル政府間の和平交渉はゆっくりと歩みを進め、イスラエル政府は26人のパレスチナ人受刑者を10月の終わりに釈放し、同時に何千もの入植地の住宅建設を発表した。

… (後略) …

(注1) エジプト・パレスチナ間のラファ国境には、物資を搬入するためのトンネルが数多く存在する。イスラエル側は、トンネルはハマースが武器を調達するために運営していると主張し、攻撃の対象としている。フリージャーナリストの土井敏邦は、2009年1月にガザ・ラファを取材した際のことについて、「トンネルを通る物資はミルクや紙おむつ、薬などといった生活必需品で、武器調達の為ではなく住民のライフラインとして機能している。トンネル掘りに従事する労働者は、家族を養う為に従事しているのであり、他に職はないのだと繰り返した」と報告している(2009年4月5日土井敏邦講演会(於:京都大学)にてhttp://wiki.livedoor.jp/p_semi2009/d/%c5%da%b0%e6%c9%d2%cb%ae%a4%b5%a4%f3%b9%d6%b1%e9%b2%f1%a3%b3)。)

(注2) イスラエルの人権団体 B'Tselem の報告によると、2013年に西岸地区におけるイスラエル軍に殺された人の数は27人に上った。これは前年比の3倍で、2008年以降で最も多い。

(参照 “B’Tselem reviews 2013: 5-year high in number of Palestinian fatalities in West Bank”
http://www.btselem.org/press_releases/20131230_2013_fatalities_statistics)

(注3) 2006年、ハマースはパレスチナ評議会選挙にて圧勝し、ハマース主導政権が誕生した。これに対し、国際社会(EU、アメリカ、日本)はハマースは「テロ組織」だとするイスラエルの主張を支持し、パレスチナ自治政府への経済援助を停止した。2007年3月にはハマースとファタハの連立政権が発足するも、対立が激化、6月にハマースがガザ地区を掌握する形となった。それ以降、ガザ地区はイスラエルによる完全封鎖に置かれ、経済・境界を封鎖されるという、文字通りの「兵糧攻め状態」が続いている。また、ガザの完全封鎖状況は、パレスチナ人が爆発する寸前に制限を少しだけ緩和するという「生かさず・殺さず」のコントロール下にあることで、死者数を基準とするメディアの報道にはなかなか取り上げられない、という問題もある。

ハマースの選挙圧勝後の諸過程については、「ガザ地区150万人の生存まで脅かす封鎖を即刻解除せよ—06年1月パレスチナ立法評議会選挙でハマースが圧勝して以降の諸過程—」

(http://www.liveinpeace925.com/palestine/anti_occupation57.htm)に詳しい。封鎖されたガザの具体的な状況とその問題点に関しては、古居みずえ「現在(いま)がナクバだ 封鎖されたガザで何が起きているか」(『Impaction 165 21 世紀のアパルトヘイト国家 イスラエル』インパクト出版会、2008 年)を参照されたい。

(注 4)ナクバとは、大災厄を意味するアラビア語で、1948 年のイスラエル建国により歴史的パレスチナが失われ、パレスチナ難民が発生した、パレスチナ民族にとっての悲劇的破局と喪失を指す。毎年 5 月 14 日のイスラエルの建国記念日には、パレスチナ人やイスラエルのアラブ市民は民族の悲劇を追悼し、記憶する行事(ナクバについての勉強会、破壊された村への訪問、デモ行進)を開催する。

フォト・ジャーナリストの広河隆一は、「動乱の中東の核心には、NAKBA と呼ばれる事件がある」として、40 年間に及ぶ自身のパレスチナ取材の記録を長編ドキュメンタリー映画『パレスチナ 1948・NAKBA』(2008 年)としてまとめている(『パレスチナ 1948・NAKBA』については、同映画 HP <http://nakba.jp/story.html> を参照のこと。映画の予告編は、You-tube 動画 <http://www.youtube.com/watch?v=6pX9G542SMk> で観ることができる。)

(注 5)1948 年のイスラエル建国による第一次中東戦争では、イスラエルはその領土をパレスチナの 75%にまで拡大し、故郷を追われたパレスチナ難民の数は 100 万人近くにもなった。これは当時のパレスチナの人口の半分から 3 分の 2 に当たると言われている。1948 年 12 月に国連総会は難民の帰還の権利と、帰還しない難民への補償を認める決議 194 を可決したが、イスラエルはこの決議を履行せず、現在に至るまで難民の帰還を拒否し続けている。現在、パレスチナ難民の数は 480 万人以上に上る。

(注 6)1964 年にアラブ民族主義の旗手であり、アラブ団結を象徴していたエジプトのナセル大統領の推進のもとに形成された。パレスチナ人の権利を代表する機関として成立し、国会にあたる PNC(パレスチナ国民議会)と内閣にあたる執行委員会をもつ。世界に離散しているパレスチナ人の支持を得、同年にパレスチナ民族憲章を採択している。1967 年の第三次中東戦争の敗戦を機に、パレスチナ人の主体的な解放組織ファタハが主導権を握る。

(注 7)2006 年 6 月の連立政権崩壊後、西岸はファタハ、ガザ地区はハマースが事実上政権を握る状況が続いている。

(注 8)パレスチナ難民のための救済事業を行うことを目的に、1949 年に国連総会によって設立。中東に住む 480 万人の登録パレスチナ難民に教育、保健、救済、社会福祉など、主に基礎的なサービスを提供している。(参照: 国連広報センター「国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)」
http://www.unic.or.jp/info/un/unsystem/other_bodies/unrwa/)

(注 9)1993 年のオスロ合意以降の和平交渉の過程を指す。1993 年にノルウェーの仲介により秘密交渉が開始され、9 月にアメリカ主導のもとホワイトハウスで正式調印されたオスロ合意は、イスラエルが初めて PLO を承認した合意であったが、当事者であるパレスチナ人の民族自決権や難民帰還権の問題、エルサレムの帰属問題等の重要案件については全て先送りされ、また、交渉の過程でもイスラエルの入植地建設は続けられるなど、オスロ合意を「和平のチャンス」だと考えていたパレスチナ人の願いは裏切られた。その後、2000 年 7 月のキャンプ・デービッドで行われたアメリカのクリントン大統領(当時)、イスラエルのバラク首相(当時)、PLO のアラファト議長(当時)の間での首脳会談では、パレスチナの領域を西岸の 90%以下にすること、入植地をそのままイスラエルの主権下に置くこと、国連決議 194(1948 年に発生したパレスチナ難民の帰還権を保障)を凍結することがパレスチナ人に突きつけられた。この提案を聞いたアラファト議長はこの提案を拒否し、会談は決裂した。

現地メディアで読むパレスチナ 記事原文

Diary of a war: The al-Dalou family's apocalypse

Published Saturday 01/12/2012 (updated) 05/12/2012 11:44

URL: <http://www.maannews.net/eng/ViewDetails.aspx?ID=542646>

This is the fifth in a series of journal entries documenting life in Gaza during Israel's Operation Pillar of Cloud.

November 18

Uncertainty's claws severely lacerated a feeling of comfort I thought I had, and on that hill of injustice, scrambled with adamant, immovable blocks of brutality, the inexorability of the war's inhumanity reached out to deliver its death notes to the uninformed little innocents and the elders of the al-Dalou family.

To that family, Nov. 18 marked the end of time. It was the al-Dalou family's apocalypse.

To many others, including myself, it was a time of questioning the values of a life that's lifeless. Clutching onto the little faith of smothered humanity within me, I fainted wakefully, and in a demonic sky with free-flowing arrows of unmerciful death and a sun eclipsed by the wings of savagery I carelessly floated. Oppressed freedom, aimless hopes, unfulfilled wishes, suffocated dreams, unachieved goals, unheard screams and voices, pale smiles, undiscovered paths, and above all, lost and terrified souls were all I could see inside that prison-like cloud; a Palestinian cloud that has been waiting for the winds of freedom and justice to blow for more than half a century. Dare anybody have a taste of such a life? That is the Gazan life in Gaza; the contemporary version of T.S. Elliot's *The Waste Land*. Except that April isn't the cruelest month: in Gaza, November is. And fear isn't shown to us in "a handful of dust," but in "a handful of airstrikes." That's *The Waste Land* of Gaza being wasted through the opposites of this life's values.

November 19

The war entered its sixth day, Nov. 19, and all I could do was count the passing days and nights. With every minute crawling by, the situation in Gaza kept getting worse, and that feeling of security that I deluded myself and my family with was fading as the war's heat escalated. The tunnels area, less than half a mile from my home, was being heavily hit by F-16 fighter jets, and the balcony of my house became a window of terror my family and I kept running to with every explosion to see how close those "Pillars of Smoke" were. Then, I received some shocking news. The American International School in Gaza, where I teach, was partially damaged in an Israeli raid on a nearby police station. In the 22-day war of 2008-2009, the school was completely destroyed by heavy shelling as Israel claimed military factions used it as a rocket-launching site. Since then, the school has struggled to perform its educational mission. It was never rebuilt because of the siege on Gaza and the difficulties of getting any construction materials into the Gaza Strip. Instead, the school's administration rented three buildings over the past four years and proceeded with its mission to Gazans. And during this war, the mission was again interrupted, and the school had its

share of the destructive power of the war machine. The school's buildings were just an addition to the many buildings already targeted and demolished in the Gaza Strip -- not to forget the death toll that was increasing with the careless killing of civilians and kids. And all I could do was overdose my veins with another unjust shot of sorrow to the existing sorrows in my heart, and contact my students to make them feel less hopeless about the matter. That's how the blind giants of wars all over the world are: thirsty for destruction and blood. And the price for that is the suffering of the innocents.

Ahmed Ferwana is a language and literature teacher at the American International School in Gaza.

UN welcomes State of Palestine

Published Friday 30/11/2012 (updated) 01/12/2012 16:56

URL: <http://www.maannews.net/eng/ViewDetails.aspx?ID=543512>

BETHLEHEM (Ma'an) -- The UN General Assembly overwhelmingly approved a resolution on Thursday to upgrade Palestine to a "non-member state" at the United Nations, implicitly recognizing a Palestinian state. There were 138 votes in favor, nine against and 41 abstentions. Addressing the assembly in New York ahead of the vote, President Mahmoud Abbas said the UN bid was the last chance to save the two-state solution. "Sixty-five years ago on this day, the United Nations General Assembly adopted resolution 181, which partitioned the land of historic Palestine into two states and became the birth certificate for Israel," Abbas told the 193-nation assembly after receiving a standing ovation. "The General Assembly is called upon today to issue a birth certificate of the reality of the State of Palestine," he said. The president told the UN that Israel's war on Gaza highlighted the urgency of ending the Israeli occupation. "It also reaffirmed the Israeli government's adherence to the policy of occupation, brute force and war," he said. "We believe that the international community is standing before the last chance of the two-state solution."

Flood of threats

"We've listened for the last months to the incessant flood of threats in response to our peaceful, political and diplomatic request in the UN and have watched (Israel's) war on Gaza," Abbas said. "We haven't heard one word from any Israeli official expressing sincere concern for the peace process." At least 17 European nations voted in favor of the Palestinian resolution, including Austria, France, Italy, Norway and Spain. Abbas had focused his lobbying efforts on Europe, which supplies much of the aid the Palestinian Authority relies on. Britain, Germany and others chose to abstain. The Czech Republic was unique in Europe, joining the United States, Israel, Canada, Panama and tiny Pacific Island states likes Nauru, Palau and Micronesia in voting against the move. Israeli premier Benjamin Netanyahu immediately condemned Abbas' speech as "hostile and poisonous", and full of "false propaganda". "These are not the words of a man who wants peace," Netanyahu also said in a statement released by his office after Abbas spoke. US Secretary of State Hillary Clinton called the vote "unfortunate and counterproductive," saying it puts more obstacles on the path to peace. US Ambassador to the United Nations Susan Rice

called for the immediate resumption of peace talks. "The Palestinian people will wake up tomorrow and find that little about their lives has changed save that the prospects of a durable peace have only receded," she said. "The United States calls upon both the parties to resume direct talks without preconditions on all the issues that divide them and we pledge that the United States will be there to support the parties vigorously in such efforts," Rice said. She added that both parties should "avoid any further provocative actions in the region, in New York or elsewhere." The move falls short of full UN membership which needs sanction by the Security Council, where the US wields a veto. But it allows Palestine access to the International Criminal Court and other international bodies.

Lawyer: Israeli officers tortured Jaradat

Published Sunday 24/02/2013 (updated) 25/02/2013 21:07

URL: <http://www.maannews.net/eng/ViewDetails.aspx?ID=568620>

HEBRON (Ma'an) -- Israeli officers tortured Arafat Jaradat, a 30-year-old who died Saturday in Israeli custody, his lawyer and the Ministry of Detainee Affairs said Sunday. Kameel Sabbagh, a lawyer at the ministry, said he was present at Jaradat's last hearing on Thursday. The Israeli judge postponed the hearing for 12 days. "When I entered the courtroom I saw Jaradat sitting on a wooden chair in front of the judge. His back was hunched and he looked sick and fragile. "When I sat next to him he told me that he had serious pains in his back and other parts of his body because he was being beaten up and hanged for many long hours while he was being investigated "When Jaradat heard that the judge postponed his hearing he seemed extremely afraid and asked me if he was going to spend the time left in the cell. I replied to him that he was still in the investigation period and this is possible and that as a lawyer I couldn't do anything about his whereabouts at this time."Sabbagh said in a statement that Jaradat's psychological state was very serious and that he informed the judge his client had been tortured. The judge ordered that Jaradat should be examined by the prison doctor but "this didn't happen," the lawyer added.

The Ministry of Detainee Affairs said Israeli interrogators used hanging techniques and sleep deprivation to torture Jaradat in al-Jalameh prison, a day before he died in Megiddo prison. Jaradat's family, who have viewed his body, said there were traces of blood on the body. They rejected Israeli claims that he died of a heart attack. The family said they were informed that an autopsy on Jaradat's body was complete and would be returned to Hebron on Sunday evening through the Tarqumiya crossing. A Palestinian doctor and a legal team from the prisoners ministry were present at the autopsy.

2013: The year in review

Published Thursday 02/01/2014 (updated) 06/01/2014 09:35

URL: <http://www.maannews.net/eng/ViewDetails.aspx?ID=661944>

BETHLEHEM (Ma'an) -- In a year which saw continued regional backlash from the events of the Arab Spring, Palestine remained caught between regional dynamics, internal divisions, and Israel's continued occupation.

Embattled Syrian President Bashar Assad continued to hold power as 2013 became the bloodiest year in the country's conflict. In Egypt, the military ousted elected President Mohamed Morsi and increased restrictions on the besieged Gaza Strip, frequently closing the Rafah crossing and destroying hundreds of smuggling tunnels.

For Palestine, a return to peace talks brought little respite from the daily struggles of the occupation, as Israeli military forces killed a record high number of Palestinians in the West Bank. In Gaza, violent storms exacerbated the already dire infrastructure of the coastal territory after six years of an Israeli blockade.

March

US President Barack Obama arrived in the region for his first visit to Israel and Palestine since entering the White House in 2009. The visit, which largely addressed Israeli concerns, began with a meeting with Israeli Prime Minister Benjamin Netanyahu in Jerusalem before traveling to Ramallah to meet with President Abbas and to briefly visit Bethlehem's Church of the Nativity. Palestinian activists installed billboards in Ramallah and Bethlehem to highlight the fact that Palestinians have been deprived of the right to have 3G telecommunication technology because they compete with Israeli companies. Palestinian Authority police scuffled with scores of demonstrators protesting against Obama's visit, as thousands of security officers were deployed in Jerusalem and the West Bank bringing the area to a virtual standstill.

May

Thousands of people in the West Bank and Gaza Strip marked the 65th anniversary of the Nakba, an event which saw hundreds of thousands of Palestinians displaced from their homes in what is now Israel. Sirens were sounded for 65 seconds in the West Bank to mark the start of celebrations, with thousands of people gathering in Ramallah, Nablus, Qalqiliya, and other West Bank cities. "The right to return does not become invalid or ineffective as time passes, because this right is the core of the Palestinian plight," PLO official Wasil Abu Yousif said while addressing crowds at Yasser Arafat's tomb. In the Gaza Strip, faction leaders addressed thousands of people who had gathered in the streets, calling for unity in the Palestinian leadership as a number-one priority.

June

Hundreds of thousands of Palestinians cheered on 23-year-old singer Muhammad Assaf, the Gaza native who won the popular Arab Idol reality TV singing contest. Assaf not only won the title -- the first for a Palestinian -- but he was also named the UN's first Palestinian refugee goodwill ambassador. He was chosen to serve as Palestine refugee agency

UNRWA's first-ever regional youth ambassador. Upon the announcement of his win, thousands of Palestinians across the occupied West Bank and Gaza celebrated in the streets.

July

After months of prodding, US Secretary of State John Kerry announced that an agreement had been reached between the Israelis and Palestinians for the basis to resume Middle East peace talks. The talks had broke down years earlier over the issue of Israeli settlements being built on Palestinian land. "I'm pleased to announce that we've reached an agreement," Kerry told reporters. But opponents of the decades-long peace process blasted the PLO for conceding to American pressure, while demonstrators crowded Palestinian cities to demand an end to the negotiations before they began. Hamas spokesman Fawzi Barhoum said the return to negotiations was a "disaster" and a cover for the Israeli agenda of Judaization, settlement building and the displacement of Palestinians. "Stopping political reconciliation (with Fatah in exchange for) negotiations between the PA and Israel is very dangerous," he said at the time. To reassure their publics, leaders from both Israel and Palestine promised any peace agreement would be subject to a referendum.

August

In a gesture to the Palestinian Authority to encourage the resumption of peace negotiations the same summer, the Israeli government released a first batch of veteran Palestinian prisoners who had been imprisoned since before the Oslo Accords of 1994. The 26 constituted the first batch of a total of 104 long-term Palestinian prisoners, including those with Israeli citizenship, to be freed in four stages, depending on progress in the talks. The decision to free the prisoners -- most of whom had been convicted of violent attacks against Israelis -- angered the families of those killed in assaults, but the Israeli government rejected appeals from victims' relatives. Israel, in a bid to placate right-wing voters and lawmakers who opposed the releases, announced plans to increase settlement building in the occupied territories during the same period.

October

Incidents of violence between Israeli settlers and Palestinians in the occupied West Bank dotted the month of October. Settlers regularly attacked farmers during the olive harvest, injuring dozens of Palestinians and uprooting hundreds of olive trees. Various incidents were also documented in which settlers threw stones and damaged Palestinian vehicles in the West Bank. Meanwhile, Israeli media reported at least two cases in which Palestinians hurled improvised explosive devices at settler buses, in one case a school bus, which caused damages but no injuries. Additionally, on Oct. 11, a retired Israeli army colonel was beaten to death and his wife was injured in their West Bank home by suspected Palestinian assailants. Through the violence, peace talks between Palestinian and Israeli negotiators trudged on, as Israel released 26 veteran Palestinian prisoners at the end of the month and simultaneously announced the construction of thousands of new settlement homes.

● Yes4Future2013 参加者の声

ワークショップの参加者たちは、どのように学習成果を活かしているのでしょうか。
参加者の教員2名の声をご紹介します。

UNRWA学校 教員マフムード・ヌムラ

このワークショップは活気があるのがとても良いです。ワークショップをした次の日はさっそくそれぞれのアクティビティを子どもたちと一緒にやってみます。そのときの反応を見て、私の学校でやるのに適切か選んでいます。子どもたちは皆、アクティビティをするのを楽しみにしています。私の授業の様子を見た他クラスの子どもが、先生にリクエストして、他のクラスでも実施したりしています。

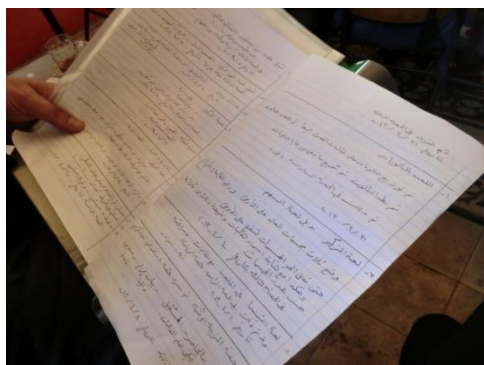


私はドラマ・エデュケーションを学校で実施することはとても大切だと感じています。学校のあるH2エリアはとても難しい状況ですし、子どもたちは皆とてもアグレッシブです。有り余るエネルギーを学校の中でしっかり出せる環境が必要です。同僚たちも私の授業に注目しています。

(スタッフが学校を訪問した際には3人の他クラスの先生が同席し、子供たちとのアクティビティの様子を見つめていました)

公立学校 教員インサーフ・アルエルミラ

ワークショップでやった内容は全てノートに書き留めて、授業をするときに使えるものを探しています。1年生のクラスは大変だ、とよく言われますが、私はそうは思いません。パペットを使ったり、色々な方法を使うことで子どもたちの関心を引き、楽しい授業をすることができます。



● 生活の場からパレスチナにつながる ～パレスチナ製フェアトレード商品の紹介～

「パレスチナに対して、今、ここからできることって何だろう??」

その一つの例が、パレスチナ製フェアトレード商品の購入です。

イスラエルの占領政策の下で、パレスチナ人の経済活動や産業活動は困難を強いられています。そんななかで、パレスチナの団体が作った製品を、フェアトレードを通じて購入することは、イスラエル社会で「二級市民」(ユダヤ人の一段下)として扱われているパレスチナ人のエンパワーメント、占領地のパレスチナ産業を支援することにつながります。」



「パレスチナ製のフェアトレード商品って一体どんなものがあるんだろう??」

下記では、日本の団体が輸入・販売しているパレスチナ製のフェアトレード商品の一部を紹介します。

★ オリーブオイル



ガリラヤ地方(現イスラエル領)のパレスチナ農業団体「ガリラヤのシンディアナ」が生産するオリーブオイルです。仙台(現在拠点は山梨)の「パレスチナ・オリーブ」という団体が販売しています。完全無農薬で育てられ、一粒一粒手作業で摘み取られたオリーブを、化学溶剤を一切使わず、低温圧搾でじっくり抽出した、上質なオリーブオイルです。

オリーブはパレスチナにとって、重要な意味を持っています。歴史的には紀元前6千年ごろから栽培され、食用、ランプの燃料、薬用、美容等、生活の様々な場面で使われてきました。そして現在、イスラエルの占領政策のもと、水の配分が著しくユダヤ系イスラエル人農家に偏っている中で、比較的乾燥に強いオリーブは、パレスチナの農家にとって、貴重な農作物です。また、オリーブの木は、持続性や土地とのつながりを象徴する

ものであり、イスラエルによる畑の破壊や土地の収奪に抵抗するために、オリーブの木を植樹することもあります。

販売をする「パレスチナ・オリーブ」は、オリーブオイルなどの食品やオリーブ石鹸など、実際に使って・食べて納得したモノを売ると同時に、継続的な現地訪問・交流、通信『ぜいとーん』の発行を通して、生産者の情報を伝えること、顔の見える関係で販売することを大切にしています。

(写真出典:<http://www.paleoli.org/?eid=3>)

★ 刺繍製品(ポーチ、バッグ、小銭入れ、めがねケースなど)



イドナ村(ヘブロン市の西、約 17km に位置)の女性たちが伝統の手刺繍を活かして手作りした小物たちです。地元広島市出身の水本敏子さんが指導するイドナ村女性協同組合により生産され、広島市西区の団体「サラーム」がバザーやカフェ、YWCA などの場で販売を行っています。伝統的なモチーフを取り入れた色鮮やかな

刺繍と手縫いの温かさが光る商品には、困難な状況のなかでも明るく前向きに生きる女性たちの思いが詰まっています。

水本さんは、1997 年の春からヘブロン市内で洋裁教室を開き、刺繍による仕事提供を通じて、女性たちのエンパワーメントを支援する活動に取り組んでこられました。イドナ村女性共同組合では、地元の女性たちが商品開発から生産管理、会計報告まで携わっています。イドナ村の女性たちが作り出す作品は、縫製の良さとオリジナルなデザイン、品質管理の高さ、納期の確実さなどにより、現地でも高く評価されているそうです。

(写真出典: <http://blog.goo.ne.jp/salam-idna/>)

★ストール(カフィーヤ/ハッタ)

ヘブロンのカフィーヤメーカー「ヒルバウイ・テキスタイル」が生産するアフガンストール(パレスチナ名はハッタ)です。静岡に拠点を置く「OLIVE D'OR」が輸入・販売しています。「カフィーヤにこんなにバリエーションがあったのか!」と思うくらい、いろんな色のコンビネーションのものが揃っていて、見ているだけでも楽しくなります。また、「Made in Palestine」のタグがついているのもポイントです。



以前はパレスチナにもたくさんのカフィーヤ工場があったそうですが、現在は安い中国製にシェア奪われ、この「ヒルバウイ・テキスタイル」がパ

レスチナ最後の一軒になってしまいました。こちらで使われている織機は、1961 年の設立当初から使われている日本製のものだそうで、大量生産にはない、昔ながらの素朴な織りが特徴です。

輸入・販売を行っている「OLIVE D'OR」は、代表の原さんが、2010年にフランスに語学留学に行った際にクラスメイトだったパレスチナ人女性と2人で、立ち上げました。カフィーヤの他、乾燥デザート(ナツメヤシ)やオリーブ木工芸品の販売も行っています。古くからパレスチナの伝統産業の一つであったオリーブ木工芸は、家族経営の小さな工房が多く、占領政策の影響から、持続的経営が難しい状況にあります。家族を支えるため、他国に職を探しに行く人が後を立たず、職人の数が減少するなか、「OLIVE D'OR」はパレスチナの人々が経済的に自立して、自分たちの土地を離れなくてもすむような仕組みづくりを目指して活動しています。

(写真出典:<http://www.olivedor.jp/shop/?p=4683>)

上記で紹介した商品・販売する団体に関する詳細は、下記をご参照ください。

- ・ 「パレスチナ・オリーブ」<http://www.paleoli.org/>
- ・ 「サラーム」<http://blog.goo.ne.jp/salam-idna>
- ・ 「OLIVE D'OR」<http://www.olivedor.jp/shop/>

パレスチナの製品を味わう、手に取る、身にまとうことは、パレスチナの人々の自立的な経済活動を支援するだけでなく、受け取る側が、五感を通じて、それを作った人々の具体的な生への想像力を働かせることにつながります。

また、国際社会の無関心がパレスチナの状況を悪化させていると言われるなか、こうしたパレスチナの良質な製品を家族や友達にプレゼントすることは、パレスチナの状況について話すきっかけをつくり、考える輪を広げていく一つの手段になるかもしれません。

● パレスチナについての書籍、ウェブページ紹介

<書籍>

◆入門書

・広河隆一『パレスチナ 新版』岩波書店、2002年

ジャーナリストとして長年にわたってパレスチナを取材してきた著者が、イスラエル建国から 2002年のジェニーン難民キャンプにおける虐殺までのパレスチナの状況を記した一冊。

・奈良本英佑『パレスチナの歴史』明石書店、2005年

大国中心ではない視点から、パレスチナをめぐる歴史の理解を促す一冊。

・『まんが パレスチナ問題』講談社現代新書、2005年

パレスチナを巡る歴史の流れが、文字通りまんがで描かれた一冊。本格的な入門書を読む前に、まずは大まかなイメージを掴んでおきたい人に丁度よい“超入門書”。

◆占領について

・アミラ・ハス『パレスチナから報告します——占領地の住民となって』筑摩書房、2005年

イスラエル紙「ハーレツ」の特派員である著者が占領地から発信したレポートの数々が収録された一冊。占領という構造的な暴力の実態が浮かび上がってくる。

・土井敏邦『沈黙を破る——元イスラエル軍将兵が語る“占領”』岩波書店、2008年

元イスラエル軍将兵たちへのインタビューを通して、占領の実態を重層的に明らかにすることを試みた一冊。

・土井敏邦『パレスチナの声、イスラエルの声——憎しみの“壁”は崩せるのか』岩波書店、2004年

パレスチナ、イスラエル双方の様々な立場の当事者の声が収められている。『沈黙を破る』とともに、「中立を信望するマインド」を切り崩す一冊。

◆パレスチナに生きる人々について

・古居みずえ『ガーダ——パレスチナの女たち』岩波書店、2006年

ガザに生きる1人のパレスチナ女性ガーダの人生を追った一冊。占領との闘い／抵抗は日々を生きる中にあるということに気付かされる。

・アーディラ・ラーイディ『シャヒード、100の命——パレスチナで生きて死ぬこと』岡真理／中野真紀子／岸田直子訳、「シャヒード、100の命」展実行委員会、2003年

2000年9月に始まった民衆蜂起アル=アクサー・インティファダの中で死んでいった人々を追悼するために考案された美術展の姉妹本。遺品とともにシャヒード(死者)＝「証人」たちの唯一無二のライフ・ヒストリーを証言し、亡くなった一人ひとりの尊厳に思いを馳せる。

<ウェブページ>

・「パレスチナ情報センター」：<http://palestine-heiwa.org/>

パレスチナ／イスラエル関連の情報の「データベース」的ページ。現地の最新の動向に関する記事や、パレスチナ支援に関する多くの情報が得られる。また、書籍紹介も充実している。

・「パレスチナの平和を考える会」：<http://palestine-forum.org/>

パレスチナ問題に関心を持つ関西在住の市民・学生を中心に結成されたNGOのページ。イスラエル製品ボイコット運動の情報やヨルダン渓谷の水問題の報告が詳しい。

・「アル・ガド」：<http://d.hatena.ne.jp/al-ghad/>

パレスチナ／イスラエル関連を中心としたイベント、テレビ番組、書籍、映画などの掲示板。

・Ma'an News Agency：<http://www.maanneews.net/eng/Default.aspx>（英語）

パレスチナの主要なインディペンデントメディアで、テレビ・ラジオ放送も手がける。

・The Electronic Intifada：<http://electronicintifada.net/>（英語）

パレスチナのオンライン・オルタナティブ・メディア。パレスチナ／イスラエルに関して、商業メディアが伝えない側面を伝える。ニュースからパレスチナの日常スケッチ、メディア検証、アート紹介、政治的・経済的分析、イスラエルロビーウォッチと、様々なベクトルの記事を提供する。

・Visualizing Palestine：（英語）

<http://visualizingpalestine.org/infographic/Palestinian-Israeli-Peace-Talks-Settlements-Oslo>

パレスチナ／イスラエルを取り巻く状況を端的に示した風刺画を数多く提供。